

真夏の湖

十六夜カラル

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ある日少年が幽霊が見えるようになり、色々な事件に巻き込まれる

目次

幽霊少女と世界の裏側

—
1

幽霊少女と世界の裏側

ある日のことだった。

学校に遅れそうになったので、走って学校に向かった。

学校までは歩いて15分しかし、今日家をでたのは遅刻時間10分前であった。

この5分という時間を縮めるには走るしかない。

そう思い走っているときだった、いきなりバコンという音がした。体が倒れる。その時一瞬見えた。

同じ学校の制服を着た女子の生徒が。俺はすぐに謝ろうと思い、立ち上がり、謝ろうとしたときであった。

目の前にいたのは、女子ではなく、男の人だった。その人は黒い服を着ていて、目元がよく見えなかった。

男の人はいきなり俺の腕を掴んでペンを取りだし、腕になにかを書き出した。

「ちよ、何してるんですか！」俺は思わず言ってしまった。すると男の人は何も答えずにそのままペンを俺の腕に

走らせる。

少しすると、男の人はペンをしまい、走って何処かへ逃げるように走っていった。

「何なんだ？」俺はそう思い自分の腕を見た、すると腕には謎の暗号が書かれていた。

しかし、驚くのは早かった。なんと、その暗号はだんだんと腕にめり込むように消えていく。

その時、頭に鋭い痛みが走る。体が地面に付き、そのまま気を失ってしまった。

「ハッ！」

目を覚ました。そこは自分の家だった。

時間は昨日と同じ、俺はスマホに電源を付け、日付を確認する。

「な、何故？」俺は驚いたなんと時間が戻っていたのだ。

あのあと何が起こったのかわからないが、時間が戻っている。

科学では証明できないことだった。きっと何かの間違いだ。そう思い、俺は学校に向かった。

家をでた時間も昨日同じだった。なので、走って学校に行った。

そして、ちょうどあの男にあったところに差し掛かった時だった。

パソコンとまた何かに当たった。

しかし、今回は倒れることなく、たったままだった。

そして、「すいません」と謝り、学校へ向かおうとすると、「まっ」
と後ろから声

が聞こえた。

俺はその女子の方へ歩いていき、「どうかしました？」と訪ねた。

「私のことが見えるの？」よくわからない質問だった。

「え？おいおい、そんなあたりまえだろ？」俺は自分の思うように答えた。

「どうして？」またよくわからない質問をされる。

「決まってるんだろ！見えるものは見えるのさ」俺はその女子の腕を掴んで「早く行くぞ」と、言って学校え向かった。

向かう途中俺は思った。あの男は何者なのか？腕にかいたものはなんだったのか、何故時間が戻ったのか

考えるだけ自分がおかしくなりそうになる。

「そろそろつくよ」おれは彼女に伝えた。

続く